July 2023 Vol.149

IIBC NEWSLETTER

2023年7月発行

キクチ タケシさん

渋谷 大さん

森迫 永依さん

[Special Feature]

どうすれば高められる？

英語での コミュニケーション 能力

TOKYO FREE GUIDE

田中 慶子さん

藤尾 美佐さん

[Special Project]
英語学習者のモチベーションを高める
TOEIC® Speaking Test

[English in My Life]
ライフスタイルを広げ人生を豊かにしてくれる
英語はわたしの宝物

[English Frontline]
英語をはじめ諸外国語でのコミュニケーション能力が身につく
観光ボランティアガイド

IIBC
一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会
The Institute for International Business Communication

特 集

どうすれば高められる?

英語での コミュニケーション能力

文法力や語彙力といった英語力は身についているのに、英語を話すことができない、英語でのコミュニケーションが苦手――という方は多いのではないでしょうか。今回の特集では、英語でのコミュニケーションをスムーズに行うためには、どのような能力が必要なのか、また、どんな学習法が有効なのかについて、外資系企業での勤務などを経て、現在、英語でのコミュニケーション能力を研究している東洋大学経営学部教授の藤尾美佐氏と、これまで数々の世界のトップリーダーたちの通訳を行い、現在では英語コーチングも実施している田中慶子氏に話を伺いました。

英語での方略的能力を身につけコミュニケーション上手になる

円滑なコミュニケーションに必要な方略的能力

私が以前、外資系の企業に勤務していたとき、日本人のビジネスパーソンが英語のネイティブスピーカーとやり取りする姿を、数多く見てきました。彼らの中には、文法力や語彙力といった英語力はそれほど高くないのに、コミュニケーション能力は非常に優れていて、相手と信頼関係を築いている人がおり、感心させられました。

一方で、英語力は高いのに、会話となるとうまく話すことができないという日本人もたくさん見てきました。「この差は、どこから生まれるのだろう。言語能力とコミュニケーション能力には差があるのではないか？」と、考え始めたことが、英語の方略的能力を研究するきっかけになりました。

方略的能力とは、「言いたいことがうまく言えない場合や、円滑なコミュニケーションを進めたいというときに、言語能力やほかの能力を使いこなす力」と定義されています。私はこれをさらに広く捉え、「自分の知識はもちろん、相手の知識や背景を活かしながらコミュニケーションする能力」であると考えています。

東洋大学 経営学部 教授
現代社会総合研究所 所長
藤尾 美佐氏

この方略的能力を具現化するのがコミュニケーション方略で、コミュニケーションの状況や段階に応じて、次のような3つのタイプに私は分類しています。それぞれのタイプの方略的能力を身につけていくことが、英語でのコミュニケーションをスムーズに行っていくための第一歩になると考えています。

まず身につけてほしいタイプ 1 の方略

タイプ1は、話し手の立場であれば、「適切な単語が分からない」「話したいことを英語でうまく表現できない」といった問題が生じたときに対処する能力です。

例えば、ホチキスという言葉は、英語だと思っている人が意外に多いのですが、英語では“stapler”と言います。このホチキスを、うっかり英語の会話の中で使ってしまい、相手に“What's that?”と聞き返されたとします。このときに“stapler”という単語がすぐに思いつかなければ、対象となる言葉の上位語を出すという方法があります。例えば、“It is a tool.”と説明し、次に “That puts the papers together.” というようにつなげて、「紙と紙をとめる道具です」と説明できるのです。

また、ある動物の名前の英語が思い浮かばないというときには、“It is a kind of animal.”と、この場合も上位語を使って言い換えることができます。

一方、聞き手の立場の問題としては、相手の話していることが理解できないというケースが考えられます。そういうときは素直に“Could you repeat that?”や “Could you say that again?”などと言って、聞き返すことが必要です。

しかし、こうした質問ばかり繰り返していると、理解していないと思われがちなので、“Could you give me some examples? ”と言って、相手に例を挙げてもらったり、“What exactly do you mean by〜? (〜とは、どういう意味で使っていますか?) ”と、理解できなかった点にしぼって質問をすることも1つの方法です。

タイプ2は、相手の知識や背景を活かしながら、話し手として情報をうまく伝えていく能力です。まず、相手の知識を確認してから、会話の土台づくりをすることがポイントになります。“Have you heard of 〜?”、“Do you know 〜?”と、自分が話したい事柄について尋ねたり、逆に、自分が持っている知識の限界を相手に伝えることからスタートするのも、コミュニケーションの土台づくりになります。

私が外資系の企業に勤めていたときに知り合ったあるビジネスパーソンは、この会話の土台づくりに長けていて、まず、「このことについてご存じですか？」という質問を投げかけ、相手の背景知識を前景化させ、さらに自分との共通点を見付けてうまく会話を進めていました。

一方、英語のネイティブスピーカーがよく使うのが、これから話す内容の枠組を提示する方略です。例えば、“From〜's point of view (〜の観点からは) ”、“In the case of 〜 (〜の場合は) ”と、前提条件を明確にしたり、“There are three reasons.(3つの理由があります)”と前置きしてから説明を始めたりすることで、聞き手の正確な理解を促すことができます。

タイプ3は、聞き手の立場から、「あなたの話を理解していますよ」という意思を表示し、相手の気持ちに寄り添って会話を進めていく方略です。

日本人はよく「うん、うん」とあいづちをしますが、これを初めて見るネイティブスピーカーにとっては、あいづちが頻繁過ぎるという印象を受けることもあるようです。

自然なのは、“That's great.”、“That's interesting.”など自分の興味を示す方法で、“That's 〜”に使う形容詞は、“exciting”や“awesome”など、様々なバリエーションが考えられます。

英語でのコミュニケーション方略のタイプ

タイプ1 話し手の立場 聞き手の立場

話し手の立場
「話したいことを英語で表現できない」
聞き手の立場
「相手の言っていることが理解できない」
などの問題に対処する能力

タイプ2 話し手の立場

相手の背景知識を活かしながら、話し手として情報をうまく伝え、よりコミュニケーションを円滑に進めていく能力

タイプ3 聞き手の立場

聞き手の立場から、「あなたの話を理解していますよ」という意思を表示し、相手の気持ちに配慮して会話を進めていく能力

また、“must”や“may”などの推量を表す助動詞を使えば、“You must be very tired. (お疲れでしょうね) ”などと、思いやりの気持ちや同意も示すこともできます。

さらに簡単な方法は、相手の発言を繰り返すことです。例えば、“I went to Kyoto this weekend.”と相手が言った場合、“Kyoto. That's a lovely place.”などと返せば、相手の話に興味を持っていることを表現できます。

英語学習の初心者にまず身につけてほしいのは、タイプ1の方略で、英語でのコミュニケーションには必要不可欠な力だといえます。次に習得すべきなのはタイプ3で、英語でのコミュニケーションに自信がなかったとしても、「私はあなたの話を理解していますよ」と、聞き手としての存在感を出していくといいでしょう。

基礎的な知識があれば英語でのコミュニケーションは可能

英語でのコミュニケーションを円滑に進めるためには、方略的能力を身につけること以外に、様々な国の歴史や文化に関する知識を持っていることも重要です。もちろん、自分の国である日本についても、相手に説明できるよう知識を深めておくことが必要です。学生であれば、海外にも多くのファンがいる日本のゲームやマンガなどを話題にすれば、よりスムーズなコミュニケーションができるでしょう。いずれにしても重要なのは、会話の中で相手との共通点を見付けて、相手への関心を積極的に示していけるかどうかだと思います。

また、英語でのコミュニケーションがなかなかうまくならないと悩んでいる人の中には、「完璧な英語を話さないといけない」と思われている方が多いのではないでしょうか。

そもそも話し言葉と書き言葉は全く性質が異なります。書き言葉は、読み手が聞き返したりすることはできませんから、書き手はできるだけ正確な文法で、誤解を生まないように説明する必要があります。

一方、話し言葉は会話している人たちがその場で作り上げていくものですから、複雑な文章を作る必要はありません。基礎的なレベルの知識しかなくても、自分の英語力をあくまでもポジティブな価値として捉え、その力を是非活かしていってほしいと思います。

「エア会話」や「実況中継」といった アウトプットの学習を取り入れる

ブロークンな英語も個性として認められる

ここ数年、英語を母語としない人たちの英語力に対するネイティブスピーカーの意識が、様変わりしてきていると感じています。私が英語の学習を始めた頃は、いかにネイティブスピーカーに近づくかを目標とし、ネイティブスピーカーからも、自分たちと同レベルの流暢な英語を話してほしいという思いが感じられました。しかし最近では、多様性を尊重する意識が広がり、英語を母語としない人たちの少々ブロークンな英語も、個性の1つだと捉える人が増えています。

これは、国際会議に通訳として参加したときに、ある国際的な企業の日本支社長として赴任した、アメリカ人の方から聞いたエピソードです。

赴任当時、その方は全く日本語が話せなかったので、秘書も周囲のスタッフも、英語が話せる日本人を選んだそうです。ある日、外出予定を確認していると、秘書に“You'd better leave here by two o'clock.”と言われて憤慨したといいます。英語で“You'd better”というのは、かなり上から目線な印象を与えるのですが、それが秘書だけでなく、他の日本人スタッフも同じ言い方をするので、「日本人は礼儀正しいと思っていたのに、言い方が失礼だ」と感じたそうです。しかし、あるとき「これだけ多くの日本人が“You'd better”を使うのには、何か理由があるに違いない。きっと、英語の意味を誤解して覚えたのだ」と気付き、考えを改めたそうです。

多くの日本人は、学校で“had better〜”は「〜した方が良い」という意味だと習ってきましたが、ネイティブスピーカーにとってはかなり上から目線の言い方で、例えば、親が子どもを叱ったり、目下の人を厳しく注意したりするときなどに使うのです。

その方は、彼らの英語力について理解を示し、「ネイティブスピーカーである自分に対して、英語が母語でない人が、一生懸命に学んだ英語を使って話してくれていることに、私はもっと寛容にならなければいけないと思った」とおっしゃっていました。

英語はあくまでコミュニケーションのツールの1つです。通訳の仕事を通して実感しているのは、これからは、ネイティブスピーカーのような流暢さではなく、自分の思いを伝えること、そして、文化や言語が異なる相手への理解を重視しながら、英語力を身につけていく必要があるということです。

アウトプット学習のお勧めは「エア会話」と「実況中継」

「日本人は英語でのコミュニケーションが苦手」というイメージがあります。一方で、私は技術的な意味での日本人の英語力は、国際的に見て高い水準だと思っています。今や小学生から英語を習う時代ですし、社会人になってからも学び続ける人がたくさんいますから、英語力が高いのは当然だといえます。とはいえ、努力して身につけた英語の知識も、経験を通して使わないとスキルにはなりません。

私が英語学習者の方に「どんな学習をしていますか？」と質問すると、たいていは「英語のドラマを見ています」とか、「YouTubeで英語を聞いています」という答えが返ってきます。インプットはそれで良いのですが、できることならアウトプットの学習を取り入れてほしいのです。理想は英語で会話をすること。例えば、英語の学校に行くとか、英語を話す友達を見付けることも1つの手ですが、それが難しいという人もいるでしょう。

そういう人にお勧めしたいのが、英会話ならぬ、「エア会話」です。つまり、目の前に英語を話す相手がいると想像して、1人で架空の会話をするのです。

例えば、英語で「夏休みはどんなことをするのですか？」と聞かれたら、どう答えよう？ と考えてみる。頭で考えるだけでなく、実際に発話してみることも大切です。

「エア会話」をやっていて、分からない言葉が出てきたら、すぐに調べてください。それを繰り返すことで、ボキャブラリーを会話の中の文脈で覚えることができるため、参考書などで英単語を丸暗記するより、効率よく定着します。

また、私が通訳になりたての頃によく行ったのが、目の前に見えるもの全てを英語で実況中継していく学習法です。

英語でのコミュニケーション能力を高める学習法

エア会話

- 架空の質問を考える
- 質問にどう答えるかを考える
- 頭で考えるだけでなく実際に発話してみる
- 分からない言葉が出てきたらすぐに調べる

実況中継

- 目の前に見えるもの全てを英語で実況する
- 単語だけを並べていってもいい
- 頭から英語のボキャブラリーを取り出す訓練をする

学習法の注意事項

目標設定のハードルを低くする	2週間やって続かなければやり方を見直す	日常生活の中で習慣化する

例えば、駅に向かいながら、“station”でしょ、“ticket”、そして“gate”、“train”……としゃべってみる。簡単な単語ばかりのようですが、やってみると、意外な言葉が思い出せないことがあります。英語の実況中継はいわば、コミュニケーションのウォームアップです。自分の頭の中の引き出しから、ボキャブラリーを取り出しておくことで、いざというときに役に立ちます。

また、英語で日記をつけるなどのライティングも、アウトプットの学習にお勧めです。

目標設定のハードルを下げ、無理なく学習を続ける

学習がなかなか続かない、あるいは、思うように英語力が伸びなくて途中でやめてしまった、という話をよく聞きます。こうした挫折の理由の1つに、学習目標が高過ぎることがあると思います。

私の周りには、「英語学習のためにとりあえず、英語のニュース番組を見始めました」という人が非常に多いのですが、ニュース番組は何よりスピードが速いですし、国際機関の名前や外国の地名など難しい単語がたくさん出てくるので、特に英語学習初心者にはお勧めできません。

最初に難しい内容の番組を見てしまうと、理解できないことが多くてつまらないと感じる。すると、当然、学習への意欲は下がってしまいます。ちなみに、私が英語を学び始めたときの教材は、子ども向けのディズニー映画やセサミストリートで、楽しみながら英語を覚えていきました。

英語学習を長続きさせるこつは、最初は目標のハードルを低く設定すること。そして、学習の仕組みを考えることです。

英語の学習を毎日3時間やろうとしたら、途中で無理が生じるかもしれませんが、1日5分ならできそうですよね。手始めに2週間と期間を区切って、1日5分の学習を続け、それができたら、今度は1日10分、15分と時間を増やせばいい。2週間やって続かなければやり方を見直せばいいのです。

例えば、毎日、朝ごはんを食べてコーヒーを飲んだら5分、スマートフォンで学習しよう。こんな風に日常生活の中で習慣化すれば、無理なくできる学習を続けられるでしょう。また、英語を学ぶバディを見付け、学習状況を報告し合うのも良いでしょう。

チャレンジしたい TOEIC® Speaking & Writing Tests

コミュニケーションの基盤となる知識は、非常に重要です。そういう意味では、TOEIC® Programの受験に向けた学習は英語の知識の習得につながりますし、「TOEIC® Programの学習で身につけた知識をどう活かそう?」と、自分の将来を思い浮かべることは、英語を学習する大きなモチベーションになると思っています。

また、コミュニケーションはアウトプットがあって成り立つものですから、できれば、TOEIC® L&Rだけでなく、アウトプットする力を測るTOEIC® S&Wにチャレンジしてほしいと思います。

TOEIC® L&Rのスコアを採用や人事評価の基準として取り入れている企業は多いと聞きますが、今後はTOEIC® S&Wのスコアで、英語のアウトプットがどれだけできるのかという指標を取り入れたら、日本人の英語学習の方向性も大きく変わるのではないかと考えています。

いずれにせよ、自分は英語力を身につけて何がしたいのか？ 英語を話す目的は何なのだろう？ と考え、学習の先にある目標を明確にすることが、英語でのコミュニケーション能力の向上につながると思います。決して背伸びをせず、自分に合った仕組みで学習を続けてほしいですね。

そして、英語を母語としない人たちのブロークンな英語に対して寛容になってきている今がチャンスだと思いますので、是非、グローバルな舞台でのコミュニケーションに、チャレンジしていただければと思っています。

通訳者
田中 慶子氏

TOEIC® L&RはTOEIC® Listening & Reading Test、
TOEIC® S&WはTOEIC® Speaking & Writing Testsの略称

英語学習者のモチベーションを高める

TOEIC® Speaking Test

RIZAP ENGLISH株式会社とIIBCは、2022年4月〜7月にかけ、共催でラジオの企画番組を放送しました。その企画において、シンガーソングライターのキクチタケシ氏に、RIZAP ENGLISHの英会話コースを受講していただき、どのくらいスピーキング力が身についたのかをTOEIC® Speaking Testで測定したところ、スコア40点アップという素晴らしい結果を残されました。今号では、英語学習においてTOEIC® Speaking Testがどのような影響を与えるのか、RIZAP ENGLISHで法人営業の責任者を務められている渋谷大氏と、キクチタケシ氏をお招きし、お話を伺いました。

加点方式の評価が、英語学習者に自信を与える

圧倒的なアウトプット量で英語脳を鍛える

RIZAP ENGLISHは、短期集中で確実に結果を出すことを目的とした英会話スクールです。30代・40代の現役世代を中心に50代・60代の方も多く通っていただいており、仕事で急遽英語でのスピーキング力が求められるようになった方などが来校されるため、英語の駆け込み寺とも言われています。専属トレーナーが作成する学習プランをもとに、週2回のマンツーマンレッスンのほか、レッスンがない日も大量の「シュクダイ」に取り組んでいただくのがプログラムの特徴となっています。

多くの日本人が、ある程度英語の知識があるにもかかわらず話すことができないのは、アウトプットのトレーニング機会がほとんどないからです。そこで「英語脳養成トレーニング」と銘打ち、圧倒的なアウトプット量で英語への反射神経を鍛え上げていきます。特に自宅での学習は重要で、1日3時間は英語学習のために確保するようゲストにはお願いしています。例えば、教材を使い、毎日繰り返し音読しながら同時にイメージをするなどの自己学習で、英語処理能力を鍛えつつ、1日1回のネイティブスピーカーとのオンラインレッスンで、実践的な発話力を強化するといった学習法を推奨しています。

「伝わる喜び」を実感できるTOEIC® Speaking Test

短期間でも集中すれば、英語は話せるようになる——。当校を卒業された皆さんはそれを実感しており、そういった体験者の生の声や、英会話スクールが果たせる役割などを、広く多くの方に知っていただきたくて、2022年、FMヨコハマで「RIZAP ENGLISH presents Beyond The Future」という企画番組を16週にわたり放送しました。

番組では、シンガーソングライターのキクチタケシさんに、モニターとしてRIZAP ENGLISHの英会話コースを実際に受講していただき、レッスンの様子や感想などをリアルに語ってもらいました。そして、キクチさんの英語力の変化を分かりやすく可視化するため、効果測定としてTOEIC® Speaking Testを採用し、レッスン開始前と、3か月後のコース修了時に同テストを受験してもらいました。

私が、TOEIC® Speaking Testならではの特徴として注目しているのは、AIなどではなく、専任のエキスパートが人の手で採点を行っているところです。文法の間違いなどといったマイナスのポイントより、「言っていることが伝わるかどうか」に重点を置き、加点方式で評価してくれるので、受験者の大きな自信につながると思います。

英語を学習する人にとって、自分の英語を実際に外国の方が聞いて、「内容を理解できるよ」と言われることほど、心強いものはありません。RIZAP ENGLISH でも今後、伝わる喜びを実感できるTOEIC® Speaking Testをうまく活用して、ゲストのモチベーションを高める方法を考えていきたいと思います。

RIZAP ENGLISH株式会社
店舗サポートチーム
法人営業責任者
渋谷 大氏

RIZAP ENGLISH

RIZAP ENGLISHでは、「英会話コース」「TOEIC® L&Rスコアアップコース」「法人向けパーソナルコース」の3コースを開設。法人向けにはプレゼンコースもあり、効果測定としてTOEIC® Speaking Testを採用しています。

TOEIC® L&RはTOEIC® Listening & Reading Testの略称

現在のスキルがきちんと評価されるので励みになる

短期集中で英会話にチャレンジ

僕は小さい頃からピアノに親しみ、歌うことも大好きでした。ボイストレーニングにも通い、2006年、29歳のときに「街」という楽曲でCDデビューしました。現在は大阪、横浜を中心に各地でライブを行うなど、様々な音楽活動を行っています。洋楽、特にAOR（アダルトオリエンテッドロック）というジャンルが好きで、コンサートでは必ず数曲カバーして歌っているので、英語は常に身近な存在ではありました。また、ときには海外のアーティストと一緒に仕事をすることもあり、頭で考えれば何とか会話するくらいはできていたのですが、もっと自由に英語が話せるようになりたいという気持ちがずっとあって、今回のラジオ企画に声をかけていただいたとき、これはチャンスだと思いました。

初めに、何も学習していない段階でTOEIC® Speaking Testを受験しました。テストなんて久しぶりで、思ったよりも手ごわく、画面に向かって思わず「うーん」と唸ってしまいましたね。例えば、絵を見て説明する問題で、「ここにりんごがあります」くらいのことしか言えず、その後の言葉が続かないのです。最後の方は問題の意味すら理解できなくて、本当に悔しかった。けれども、おかげで俄然やる気が出ました。

トレーナーには、特にリスニングを強化したいと希望を伝えました。何も見ずに耳から聞いた英語を理解するのが自分には難しく、ハードルはここにあるなと感じていたのです。それで英語の音声を聞くだけで光景が想像できるくらいになるまで、繰り返しレッスンしてもらいました。

一番大変だったのは、家で学習する時間を捻出することだったかもしれません。ミュージシャンという仕事がら、まとまった時間を毎日取るのは難しいので、移動の際には常にスマートフォンに入れた音声を聞き、本来は90分程度1日音読しなければならないのですが、効率的に弱点に集中してスピードを上げ、30〜40分でも効果的なトレーニングを行えるようトレーナーからアドバイスをもらいました。

1か月半くらい経った頃から、だんだん実力がついてきたことを実感できるようになりました。トレーナーとのオンラインレッスンでも、最初の頃は日本語で質問していたのですが、いつの間にか会話が英語中心になっていました。英語を話すことのハードルが下がり、間違っていてもいいからやってみようという前向きな気持ちになれたのだと思います。また、電車などで海外の人たちが話していると、自然と耳から英語が入ってくるようになったのは、ちょっと新鮮で面白い感覚でした。

シンガーソングライター
キクチタケシ氏

このテスト、
皆さんにも
受験してほしいです

2回目のTOEIC® Speaking Testで感じた手応え

3か月間の英会話コースを終えてから、もう一度TOEIC® Speaking Testを受験しました。同じテストと思えないほどまるで印象が違い、自分でも驚きました。以前は、文を全部聞いて、頭の中で遡って日本語に直している間に、もう次のセンテンスにいってしまっている感じでした。それが、耳に入ってくる英語を、分かる単語だけでいいから順番に聞き取っていくというトレーニングをしてきたおかげで、英語を英語のまますんなり理解できたのです。それから発話の際に心掛けたのは、目に入ったものを、考えるより先にどんどん口に出して、とにかく時間いっぱい何かを言い続けることです。「ここにりんごがあります」で終わらずに、「赤いりんごがあります、美味しそうなりんごがあります」と表現を変えて、文法など気にせずに何度でも言いました。

自分でもなかなかよくできたという感覚があり、実際に初回90点だったスコアが130点にアップしていました。130点ってどれくらいなのだろうと調べたら、「海外でも働けるレベル」とあり、努力が認められたようでうれしかったです。

TOEIC® Speaking Testは、身につけたものをきちんと評価してくれるので、とても自信につながります。スコアももちろん大事ですが、何より実際に受けたときの感覚、手応えを感じられるのがこのテストの魅力のような気がします。これはうまく言えた、ここはちょっと難しかったというように、自分が今持っているスキルがよく分かるので、励みになります。TOEIC® Speaking Testというと、英語上級者向けのようなイメージがありますが、実際に体験してみたら、時間も短いし、内容も面白くて楽しいものでした。英語が好きな人なら、是非気軽に挑戦してみてほしいですね。

今回、3か月の英会話レッスンの機会をいただいて、大人になっても学習できるものなのだと実感しました。一歩を踏み出しさえすれば、そこには必ず新しい世界が広がっています。僕も学習する楽しさを覚えたので、これからも英語と楽しく付き合っていきたいと思います。

ライフスタイルを広げ 人生を豊かにしてくれる 英語はわたしの宝物

俳優
森迫 永依さん

Profile

もりさこ・えい　1997年千葉県生まれ。2002年から子役として活動し、ドラマ「あした天気になあれ。」(日本テレビ)や「新しい風」(TBS)など数々の作品に出演。06年には実写版「ちびまる子ちゃん」で主役のまる子役を演じてブレイク。以降、ドラマ「幽かな彼女」(関西テレビ)、「逃亡医F」「紅さすライフ」(ともに日本テレビ)やバラエティなど、幅広く活躍している。特技は英語(TOEIC® L&R970点)、韓国語、中国語。

子役でデビューしてから、実写版「ちびまる子ちゃん」で主役のまる子役を演じるなど、多数の映画やドラマ、CMなどに出演されている俳優の森迫永依さん。高校生のとき、交換留学生に話しかけられなかったことがきっかけで、英語を絶対に身につけようと、英語漬けの日々を送られたそうです。

得意だと思っていた英語が話せなかった悔しさを力に

小さい頃から、外国語が身近にある環境でした。母は中国人で、学生時代に努力して英語を身につけていて、自分の娘にも語学が得意になってほしいと、幼い私に中国語や簡単な英語でよく話しかけてくれました。そうしたベースがあって、中学の英語は努力しなくてもある程度理解できたので、自分は英語ができるのだと思っていました。中学3年生くらいになると授業も難しくなってきて、成績が少し下がることもあったのですが、気にはしませんでした。

外国語が身近にある環境で育った幼少の頃の森迫さん

高校に進学して1年生のときに、クラスに交換留学生が来て、英語がペラペラの友達はすぐにその子と打ち解けて、楽しそうにおしゃべりをしていました。自分も英語が得意なつもりだったので、その子に話しかけたかったのですが、いざ話そうとすると全く英語が出て来ません。思ったことを1つも伝えられないのです。

友達はできるのに、どうして私はできないのだろう。自分の中にあった、英語に対する漠然とした自信が砕かれました。今まで英語にちゃんと向き合わず、中途半端な学習しかしてこなかった。そのせいで目の前にいる留学生の子と友達になれないし、興味があっても何も知ることができない。それが本当に悔しくてショックでした。

この経験をきっかけに、私は絶対に英語を身につけようと心に決めました。そして英語に力を入れている大学のAO入

TOEIC® L&R は TOEIC® Listening & Reading Test の略称

試を目指し、高校2年生の春から徹底的に英語の学習を始めたのです。

自分なりの学習法で 4技能をバランスよく伸ばす

受験英語に特化した塾に通いながら、自分で工夫した方法で学習を進めました。まず、文法の本を最初から最後まで読んで、しっかり基礎を固めます。それと並行して、受験用の英単語を毎日100語ぐらい覚えていきました。ポイントは、出てきた単語の類義語や反義語を調べて一緒に覚えること。そうすることで効率よく語彙を増やせるし、1つのことを言うにも表現の幅が広がるので、これはお勧めです。

次に、リーディング、リスニング、ライティング、スピーキングの4技能それぞれの課題を考え、1週間のスケジュールを立てました。

リーディングは海外のニュースサイトを読み、リスニングは主に英語のプレゼンテーションの動画を聞いて、分からないところは後からスクリプトを確認します。リーディングやリスニングは、インターネットに無限のリソースがあふれているので、自分が興味を持てるコンテンツを探してうまく利用すればいいと思います。

ライティングとスピーキングは、アウトプット量を多くすることが第一なので、意識的に時間を取るようにしました。例えば「グローバルウォーミングについてどう思うか」といったトピックを決めて文章を書き、塾や学校の先生をつかまえて添削してもらいました。

スピーキングはとにかく英語を声に出す機会を作って、先生に話しかけたり、学校で友達と英語だけで話したり、独り言も英語で言っていましたね。

語学は1、2か月の学習で習得できるものではありません。長く続けていくためには、英語学習の中に自分が楽しいと思えるポイントを見付けることが大事です。私にとってはそれが、映画やドラマを観ることでした。特に「ハリー・ポッター」が大好きで内容も知っているので、字幕なしで聞き取りをしてみたり、スラングの言い回しをメモしたりして、工夫しながら楽しく学習していました。

英語は選択肢を広げ 世界を広げてくれる

学校や塾以外に毎日8時間以上学習して、高校の2年間はまさに英語漬けの日々でした。でも、やればやった分だけ実力になって自分に返ってくるのが分かるので、とにかく楽しかったです。定期的に外部テストを受けて、点数が上がるのを見るのがモチベーションになりました。こうして夢中で学習を続けた結果、高校3年生の終わり頃には日常生活に困らないほどの英語力が身につき、大学も目指していた学部より、さらに高い英語力を必要とする学部に合格することができたのです。

大学生のとき1年間留学したアメリカの大学にて

大学在学中、アメリカに1年間留学したのも大きな経験でした。初めは自分が日本人だから、英語は母語じゃないからという引け目があってうまく話せなかったのですが、英語しか伝わらない相手と必死にコミュニケーションして人間関係を築いていくうちに、そんなコンプレックスは消えていました。帰国するとき、イギリス人の学友に「1学期と比べて本当によく話すようになったよね」と言われて、なんだかうれしかったです。

英語ができるようになって気付いたのは、自分はまだまだ知らないことがいっぱいあるのだということ。日本語で得られる情報は、世界の中で見たらほんの一部なんです。英語のニュースなどに触れることで、今起きている時事問題を英語話者はどう考えているのかとか、海外から日本はどう見えているのかといったように、1つの物事を多角的な視点で見られるようになりました。それから、ライフスタイルの選択肢がとても広がった気がします。英語が話せれば、老後は海外で暮らそうかなんて考えることも自由なのです。ほかの国の文化や価値観を知ることもできるし、世界中に友達も作れる。英語はただの学習対象ではなく、人生を豊かにしてくれる宝物です。

英語力を身につけたことで、海外制作ドラマのオーディションを経験することもできました。現場の雰囲気や作品への取り組み方など、日本とはまた違った感じがあって、とても新鮮で刺激的でした。いつかは英語を使って、海外の作品に参加できたらいいなと思っています。それが今の目標ですね。

SDGsを身近に感じ、次なるアクションを考える

One Step Forward

SDGsの達成に向け、多方面で様々な努力が行われている中、IIBCは、SDGsを身近に感じることで、具体的にどういう行動を起こすべきかを考え、参加者全員でアイディアを共有していくことを目的にしたイベント「One Step Forward」を開催してきました。そのコーディネーターである宮川南奈氏に、イベントに対する思いや具体的な内容について話を伺いました。

One Step Forward
コーディネーター
株式会社ミエタ
プログラムマネジメント部 部長
宮川 南奈氏

SDGsを身近に感じ 行動を起こしていく“きっかけ”を提供

私の原体験は、幼少期にインドネシアに渡ったときのことです。現地に降り立ったとき9歳だった私は、豪邸が並ぶ横で車に寄ってくる物乞いの子どもや裸足で歩く人を目の当たりにし、言葉にできない感情でいっぱいになりました。涙が止まらず、今でもあのときの感情を一言で表すことはできません。この頃から、自分はいつかこんな環境を変えたいと考えました。大学に進学した後は、文部科学省が展開する「官民協働海外留学創出プロジェクト トビタテ！留学JAPAN日本代表プログラム」のトビタテ生（奨学生）として留学し、外から日本を見ることで日本にも多くの課題があることに気付き、社会をよくしたいと思う対象は新興国から日本へと変化しました。

卒業後は就職先の本業以外にも、廃棄予定の花に新たな価値を生み出す活動や、ソーシャルベンチャーでのお仕事など、SDGsに貢献できることを実践してきました。現在は、主に中学・高校生を対象とした探究学習やキャリア教育プログラ

第4回 One Step Forward

サッカーを通じてインドの子どもたちの夢実現をサポート

2023年4月13日に開催した「第4回 One Step Forward」のゲストは、萩原望さんでした。彼は、3歳からサッカーを始め、Jリーグのユースチームや大学のサッカー部で、サッカーに明け暮れる学生生活を送りました。新卒で入社した会社を3年で退職し、国際NGOの駐在員として、インドのビハール州という最貧州に派遣され、仕事の合間にサッカーをしていたところ、子どもたちが集まってきたのがきっかけで、サッカーを教えるようになりました。

現在は外資系会計監査法人のインドオフィスに勤務をしながら、個人の活動として、同州でコミュニティ型のサッカーチーム・一般社団法人FC Nonoを運営しています。このチームでは、サッカーを軸としながら、教育や栄養、アートなどを通して、インドの子どもたちの夢実現に向けたサポートを目指しているそうです。

FC Nonoは、サッカーを通じて努力が報われる社会の実現をミッションにしており、「インドでは自分の努力では変えることのできない要因で将来の選択肢が限定されており、そのような状況に変化を起こしていきたい」と萩原さんは語ります。

子どもたちの自立支援やジェンダー問題の解消を目指し、現在特に力を入れている活動はガールズサッカーです。かつて女の子が外に出てスポーツをすることがなく、将来の夢という概念もなかった村においてサッカーを広めることで、男の子がやっているように、女の子もサッカーができ、夢を持つことが可能だということを伝えています。今では、ガールズコーチをやれるほど、サッカーが上手になった女の子も出てきています。

これらの話を聞いた参加者たちは感想を互いに伝え合い、SDGsのゴールの１つである「ジェンダー平等を実現しよう」に関して、最近気になっていることや、実際に取り組んでいることなどを共有しました。最後に参加者たちが「大学でSDGsについて学ぶ授業があるので、そこで多様な人の意見を聞き、考えや意見を深めていきます」「情報収集を一生懸命やります」など、これから挑戦していくことを宣言し、「第4回 One Step Forward」が終了しました。

「第4回 One Step Forward」の開催の様子

ムを提供する仕事をしています。多様な分野の社会起業家の方々を講師としてお招きし、生徒さんが自分ならどのような行動を起こすかといった企画提案をアウトプットするプログラムなどを多く展開しています。社会で起きている様々な出来事を自分事として捉えることができる場を提供することが、私の活動の軸になっています。

One Step Forwardのコーディネーターになったのは、私がトビタテの事務局のお仕事を通じてご縁があったIIBCの方から声をかけていただいたことがきっかけで、自分が行っている活動と親和性が高いと思い、企画構想から携わりました。ディスカッションを重ねる中で、「SDGs」という言葉はよく耳にするが、自分事として捉えることができず、具体的な行動に移せていない方が多いのではないか――。そのような方たちが、何かアクションを起こしてみようと一歩前進する、その後押しができるような場を作りたいというコンセプトにたどり着きました。その思いを「One Step Forward」という名前に込め、SDGsを身近に感じ、具体的にどういった行動を起こすべきかを考え、互いの感想や小さな行動宣言を共有することを目的にしたイベントにすることが決まりました。

新たな行動を起こしていくには まずは知り、自分事として捉えることが重要

One Step Forwardでは、90分間のうち前半はゲストによる講演、後半は参加型の形式で参加者が双方向的に交流する時間を設けています。参加者は、大学生や若手社会人をメインに想定。ゲストには、20〜30代で越境体験があり、SDGsの17のゴールのどれかに当てはまるような活動をしている方をお招きしています。起業家や、NPOに所属している方、海外を拠点に活動している方など様々で、多様な働き方や社会問題などがテーマになることを意識してお声がけしています。また、イベントを告知するときには、SDGsの17のゴールのうち、どの内容に該当する講演なのかが分かるような工夫も行っています。

イベントの最後に、明日から起こすアクションを参加者の方に宣言していただく時間があり、そのときに皆さんが様々な行動を発表してくださるので、喜びをかみ締めながら運営できています。

参加者の中には連続参加の方もいて、「自分にとって未知の世界を知るきっかけとなり、とても勉強になった」という声もいただいています。年代を問わず、新たな行動を起こしていくために大切なのは、まずは社会で起きていることを知り、自分事として捉えていく経験を増やしていくことです。そのようなきっかけとなる機会を、これからも提供していきたいと考えています。

また、さらに広い社会のことを知るためには、海外に出て、自分の知らない世界に触れることも重要です。自分とバックグラウンドの異なる人や、価値観が違う人たちとの対話から生まれる気付きや発見は大きく、皆さんにとって掛け替えのない財産になるはずです。

IIBCが行うSDGs達成に向けた様々な取り組み

IIBCは受験生の皆様、社会、職員、さらには地球環境に対し、SDGs達成に向けた様々な取り組みを行っており、その主な内容を紹介します。

1 TOEIC® Programを通じて

● プライオリティサポートの実施

より多くの皆様が受験できるよう、個別の配慮が必要な方のためのご依頼窓口を設置し、可能な範囲でご希望に沿った受験環境をご提供。

● 受験のしおりの多言語化

TOEIC® Listening & Reading公開テストの受験当日に配られる受験のしおりは、英語・中国語・韓国語でも対応。

2 環境に優しく

● 問題用紙・解答用紙の再利用

TOEIC® Programで使用した問題用紙・解答用紙はリサイクル。

● リスニング用の音源メディアを再利用

TOEIC® Program（公開テスト）のリスニングセクションに使用する音源メディアの破棄をなくし、再利用。

3 社会に向けて

● トビタテ！留学JAPANへのサポート

「官民協働海外留学創出プロジェクト トビタテ！留学JAPAN日本代表プログラム」に寄附を行い、職員を日本代表の選考委員およびメンターとして派遣。さらに2020年度から2年間、職員が事務局に出向し、プロジェクト運営をサポート。

● 高校生を対象としたエッセイコンテストの主催

高校生が多様な文化や価値観に触れ、相互理解の大切さを考える機会を創出し、高校生の英語学習に貢献。

● ブックバトンプロジェクトへの参加

職員が読み終えた本を寄附することで、「子どもの教育で貧困の連鎖を断ち切る」ことをミッションにした国際NGOの活動に寄与。

4 職員に向けて

● 働きがいのある職場環境づくり

職員の自己成長支援を目的とした研修やキャリア相談の充実に取り組む。

● 女性活躍の推進

性別を問わず平等に出産・育児・介護をしながら仕事を続けることができるよう、全職員が活躍できる働きがいのある職場環境づくりに努める。

● コンプライアンスの推進

事業活動全般における行動基準および倫理基準を明文化し、法令・規定・社会規範の遵守、個人情報保護の徹底、ダイバーシティの尊重、ハラスメントの禁止などの遵守事項を全職員へ周知するとともに、定期的な教育を実施。

第1回 IIBC大学生 英語スピーチコンテストを開催

IIBCは2023年2月11日(土)、「第1回IIBC大学生英語スピーチコンテスト」を赤坂インターシティAIR(東京都港区)にて開催しました。今回はその様子や受賞者の喜びの声とともに、開催に向けての想いを紹介します。

大学生向けの英語スピーチコンテストを主催しリーダーシップの育成に貢献

「自らの主張を伝える英語スピーチを通して、グローバルな舞台で必要なリーダーシップを培うこと」を目的にした本コンテストでは、2022年に全国の大学英語会(通称:ESS)が開催したオープン大会で本選に出場した実績があることを前提条件として参加者を募りました。

第1回目となる今回の応募総数は26名。うち、10名が予選審査を通過し、2月11日の本選に臨みました。

出場者は、「現代における問題の提起とその解決」をテーマとした英語スピーチを最大8分間行った後、その内容に関する英語での質疑応答を審査員と4分間実施。日頃、ロジック(論理的に考える力)、レトリック(言葉を適切に選択する力)、デリバリー(声と体で表現する力)といったコミュニケーション・スキルを切磋琢磨している本選出場者たちは、緊張した面持ちでありながらも、堂々として説得力のあるスピーチを行っていました。

本コンテストの審査基準は、ESSが主催する従来のコンテストの審査基準をベースにしており、「主張の内容および重要性」「英語力および適切な言葉を使う力」「声と体で伝える力」「質疑応答への対応力」といった観点で審査を行いました。そして、10名の本選出場者のうち3名の方が受賞。その中で見事1位に輝いたのが、新しい環境に慣れるために日々のルーティーンを作ることの大切さや、習慣を大事にすることで得られる安心感についてスピーチした慶應義塾大学2年の山田麻心(まこ)さんです。

コンテストの様子はIIBC公式サイトからアーカイブをご覧いただけますので、是非チェックしてみてください。

これからもIIBCは、未来のリーダーとなるグローバル人材の創出に貢献してまいります。

https://www.iibc-global.org/iibc/activity/speech_contest.html

受賞者

1位 **山田 麻心(やまだ・まこ)**さん 慶應義塾大学2年
タイトル:An Invisible Star to Follow

2位 **山本 利咲(やまもと・りさ)**さん 関西学院大学2年
タイトル:Red Manicure

3位 **ブランチ 理央(ぶらんち・れお)**さん 立教大学2年
タイトル:Loving Every One

※受賞者の学年は受賞当時のもの

受賞者コメント

自分の言葉で分かりやすく伝える

山田 麻心（やまだ・まこ）さん
慶應義塾大学2年
Mako Yamada

私は今年の夏からカナダへ留学する予定ですので、日本で出場する最後の英語スピーチコンテストで優勝することができ、大変嬉しく思っています。法人主催の大会で、これまで参加してきたESS主催のコンテストとは、大きく異なってくるのではないかと思い臨みました。

ESSに所属されている方は、大学の先輩や先生にスピーチ原稿を見てもらい推敲を重ねていくのが一般的ですが、私は所属していないので、下書きから清書まで自分1人で原稿を作成して大会などに出場しています。そのため、自分のスピーチが論理的なのか、文法が正しいかなどにはあまり自信がありませんが、身近なテーマを設定し、できるだけ簡単で、状況がイメージしやすいように自分の言葉で説明をすることを心掛けています。今回、私のスピーチが評価されたということは、そのような心掛けや、自身のやり方が認められたのだと嬉しく感じています。

私は大学で経済学を専攻していますが、海外からの視点で経済を学べるなど、英語を活用することで海外の情報を取得できるということはとても便利なことだと思っています。また、英語によって世界中の人たちと会話することで自らの視野も広がっています。もしも英語を身につけていなければ、全く違った人生を歩んでいたかもしれないと感じているほどです。

将来的には、子どもたちの知育に携わりたいと思っており、そうした仕事をしていく上でのツールの1つとして、これからも英語を活用していければと考えています。

主催者コメント

ESSの伝統を尊重しつくりあげたトップレベルのスピーチコンテスト

渡部 修
IIBC企画室 室長

IIBCでは、基本理念である「人と企業の国際化」を実現すべく、グローバル人材育成のための様々なコンテンツの企画・提供を行っており、当スピーチコンテストは、その一環として開催しました。

目指したい方向へ人を導くためには、コミュニケーション力が不可欠で、良いスピーチを行うためには、論理的に思考し、適切に言葉を選び、限られた時間で声や体を巧みに使って表現することが求められます。私自身の社会人経験を振り返っても、こうした力は必要とされてきたように思われます。グローバルな場を想定するならば、英語でそれをやってみるのは恰好の鍛錬と言えるでしょう。

IIBCはかねてより、大学ESS等が主催するスピーチコンテストに協賛をしてきました。日本には、スピーチ活動の場（コンテスト）を学生間で提供し合い切磋琢磨するという素晴らしい伝統があります。新たにコンテストを主催するにあたっては、この伝統を尊重しつつ、そこで生まれたトップレベルのスピーチが一堂に会することを重視しました。その結果、２つのことが実現できたと思っています。１つは、スピーチ活動に取り組まれる方々に新たな目標をご提供すること。もう１つは、観覧される方々にスピーチ活動の良いお手本をご覧に入れることです。

出場者の方々をはじめ、第１回の実現にお力添えいただいた皆様に深く敬意を表し、感謝申し上げます。また、英語スピーチに触れたことのない方にも、是非動画をご覧いただきたいと思っております。「自分もこのような英語力、コミュニケーション力を身につけて、同じように使いたい！」と思って下さる方がいらっしゃれば、それ以上の喜びはありません。

外国人観光客が来日する前から友人のような関係を築く

2004年からスタート（11年に法人化）したNPO法人TOKYO FREE GUIDE（TFG）は、１人でも多くの訪日外国人観光客に、日本文化や日本人そのものをより深く知ってもらうため、観光ボランティアガイドを行っています。その需要は年々増加し、現在登録されているボランティアガイドのメンバーは約500名にのぼります。TFGのメンバーは、定年退職された方をはじめとし、仕事をしながら休日にボランティアガイドの活動をされている方など様々です。現在、TFGで理事長を務める川本佐奈恵氏は、「外国人ゲストからは、『日本人と触れ合いたい』『日本を歩いていて気が付く素朴な疑問を、気軽に尋ねられるような人に案内してもらいたい』といった要望が多くきます。こうした需要に応えるために、メンバーたちは、ゲストが来日する前からメールでやり取りを行い、友人のような関係を築いておき、日本でやりたいこと・食べたいもの・行きたい場所などを事前に聞いた上で、実際に案内するルートを考案し下調べを行っています」と語ります。

NPO法人 TOKYO FREE GUIDE
理事長
川本 佐奈恵氏

また、案内ルートの勉強会もメンバー同士で行うことで、訪日外国人観光客に喜ばれるスポットや、交通機関を使った効率的な案内方法などを共有し合っています。

実践的な英語の学びの場となるボランティアガイドの現場

メンバーの方たちのモチベーションがここまで高いのは、国内にいながら、外国人と英語やそのほかの外国語でコミュニケーションすることができ、様々な知識が得られることに魅力を感じているからだそうです。

「あくまでも私たちは、ボランティアでガイドをしていますので、ゲストから尋ねられて分からないことがあれば、正直に『分からない』と答え、聞き返しても構いません。また、言語の違いからうまく伝えられない場合でも、簡単な単語やジェスチャーなどで表現すれば、相手に伝わるものです。コミュニケーションにおいて大切なのは、相手の気持ちを汲み取り向き合うという人間性です。そのような意味で、この活動自体が、メンバーの皆さんにとって、言語を超えたコミュニケーション能力を身につけていく、より充実した実践的な学びの場になっているのではないでしょうか」

そのためTFGでは、メンバーの採用において、フレンドリーで挨拶がきちんとでき、人に対して柔軟に対応できることに重きを置いています。

実際、ゲストたちからは「普通のツアーでは味わえない体験ができた」「TFGメンバーのおかげで、とても楽しい時間が過ごせた」などの意見が寄せられ、帰国後も友人としての関係が続き、今度は逆にゲストの国を訪れ、案内してもらうといったケースもあるそうです。

そのようなTFGにとっての現状の課題は、コロナ禍が落ち着き、訪日外国人観光客が増えつつある中、ゲストから案内してほしいというリクエスト全てに対応できず、断らなければならないケースが発生していることです。

川本氏は「実現するのはなかなか難しいことですが、日本の文化や日本人自体をもっと多くの外国人の方に知っていただけるよう、リクエスト全てに応えられるような体制を築いていきたいと思っています」と今後の抱負を語ってくださいました。

訪日外国人観光客だけでなく、観光ボランティアガイドにとっても有意義な取り組みが、さらなる広がりを見せようとしています。

口コミで依頼があった初来日のアメリカ人観光客をご案内している様子

English Frontline

各分野での英語に関する取り組みをご紹介します

英語をはじめ諸外国語でのコミュニケーション能力が身につく観光ボランティアガイド

IIBC TOPICS

TOPIC 01

IIBC ENGLISH CAFÉ in メタバース
オープン記念イベントを開催

特別ゲスト　なかやまきんに君さん

プロフィール

1978年生まれ、福岡県出身。2000年、芸人デビュー。06年、米国「筋肉留学」でサンタモニカカレッジ卒業（運動生理学）。現在は、ボディビルダーとしても活躍中。

IIBCは2023年3月8日（水）、英語を学ぶ皆様に交流の場を提供するため、メタバース空間「IIBC ENGLISH CAFÉ in メタバース」を開設しました。そのオープンを記念し、これから就職活動を始める学生の方たちに向けて、メタバース空間を利用したイベント「教えてセンパイ！　就活でのTOEIC® Tests活用と社会での英語の必要性は？」を開催しました。

オープニングでは、特別ゲストのなかやまきんに君さんが登場。会場が盛り上がったところで、就職活動を終えた大学4年生の先輩３名が登壇し、TOEIC® Testsをどのように就活に活用したのかを含めて、リアルな体験を語っていただきました。

続いて、なかやまきんに君さんと会場に集まった参加者でTOEIC® L&Rのサンプル問題にチャレンジ。問題がクイズ形式で出される新鮮さもあり会場が一体となり楽しみました。

最後は、人生の先輩として、なかやまきんに君さんとIIBC IP事業本部本部長の永井聡一郎が登場。なかやまきんに君さんには、アメリカでの筋肉留学のために努力して英語を身につけられた苦労話や体験談などを語っていただき、永井はTOEIC® Programが企業で活用されている事例とともに、社会に出てからの英語の必要性についてお伝えしました。これから就職活動に向けてスタートを切る学生の皆様にエールを送り、イベントは盛況に終わりました。

IIBC ENGLISH CAFÉ in メタバースってどんなところ?

この空間は、英語を学ぶ皆様のモチベーションアップや、学習者同士が交流できる場所としてオープンしました。

１階には4技能ドリンク※や公式認定証を模した目標宣言フォトスポットがあり、学習の合間の息抜きやモチベーションアップにご利用いただけます。また、英語でコミュニケーションしてみたい方がチャレンジできるEnglish onlyエリアもご用意。２階は自習スペースになっています。

皆様も是非IIBC ENGLISH CAFÉ in メタバースを訪れてみてください。

※テスト前のモチベーションアップなどに効果的（効果は気持ちの問題で個人差がある）

2階の自習スペース

『IIBC ENGLISH CAFÉ in メタバース』詳細はこちら

https://iibc.me/nl_iec

TOEIC® TestsはTOEIC® L&RとTOEIC® S&Wの総称。TOEIC® L&RはTOEIC® Listening & Reading Test、TOEIC® S&WはTOEIC® Speaking & Writing Testsの略称

妥当性と信頼性がともに高いテストを提供

IIBC 調査研究室

本連載では、TOEIC® Programを開発するETSが、テスト品質の維持向上のために行っている取り組みについて、お伝えしていきます。ここまで、テスト品質を構成する以下の3大要素のうち、「妥当性」と「信頼性」について簡単に解説してきました。

- **●妥当性：測るべきことを、測れている**
- **●信頼性：テスト結果に一貫性がある**
- ●公平性：誰にでも公平なテストである

今回は、両者の違いを整理しておきましょう。TOEIC® Programの開発ディレクターを務めたProtase Woodford氏は、テストの「妥当性」と「信頼性」の違いについて、以下のように端的に表現しています。

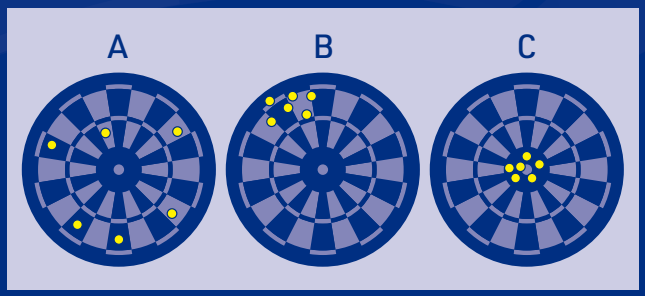
「信頼性のあるテストであっても、必ずしも妥当性があるとは限らない」

これは具体的にはどういった意味なのでしょうか？ Woodford氏が、以下のように説明しています。

「アラビア語のテストがあるとします。アラビア語文法の全ルールを理解し、中東史の知識も持つ受験者が数回にわたりいずれも高得点だった場合、**テストの信頼性はとても高い**と言えます。一方で、仮にそのテストがスピーキング力を測るテストでありながら、アラビア語のスピーキングタスクを課していないとしたら、そのテストには**妥当性がない**と言えます」

いかがでしょうか？　このアラビア語のテストは、測定に一貫性があるので信頼性は高いのですが、測ろうとしていることが測れていない（＝スピーキングテストでありながら、スピーキング問題が含まれない）ため、妥当性に乏しいわけです。つまり、信頼性は高いが妥当性はない、というケースが成り立つことを示しています。

では、さらに整理するために、図を用いて考えてみましょう。以下は妥当性と信頼性の関係性をダーツに例えた図です。円はダーツの的を、点は当たった矢の跡を表しています。これをテストに見立てたとき、妥当性と信頼性がともに高いのはA、B、Cのどれでしょうか？



正解はCです。Cでは標的に一貫して命中しています。これをテストに見立てると、測るべき対象を一貫して測れている、ということになります。対して、Aは標的を外していて（妥当性が低い）、当たる場所も様々（一貫性がない）ですし、Bは当たる場所は常に同じ（一貫性がある）ですが、標的を大きく外しています（妥当性が低い）。つまり、Cのみが、妥当性と信頼性がともに高い、テストとしての在るべき姿を表していると言えます。なお、妥当性や信頼性については様々な角度から研究や議論がされており、唯一解はありませんが、ここでは両者の関係性を明確にする目的で単純化して示しています。

TOEIC® Programについても、設計・開発・実施・運営の全てのプロセスにおいてCのような在るべきテストの姿を追求し、妥当性・信頼性の高いテストをお届けしています。

IIBC　あなたが世界をつなぐ　あなたと世界をつなぐ
一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会
The Institute for International Business Communication
IIBC 公式サイト　https://www.iibc-global.org
外部からの寄稿や発言は、必ずしも当協会の見解を表明するものではありません。

本誌は公式サイトでもご覧いただけます。
https://www.iibc-global.org/iibc/activity/iibc_newsletter.html
IIBC NEWSLETTER

【お問い合わせ】
広報・CSR チーム　pr@iibc-global.org

ETS, the ETS logo, PROPELL, TOEIC and TOEIC BRIDGE are registered trademarks of
ETS, Princeton, New Jersey, USA, and used in Japan under license. Portions are copyrighted by ETS and used with permission.